
今こそPTA!

～子どもを見守るPTAが一蓮托生に～

名古屋市立大高小学校PTA

会長 秋吉 岳也

1 はじめに

(1) 決意

「打上げ花火をやりましょう」

人が「きょとん」とする瞬間とは、こういう時なのだった。同時に、これまでのモヤモヤからドキドキとワクワクが押し寄せ、一気に視界が広がった。

PTAが暗黙の中で担ってきた、親と学校と地域との「つながり」を育む活動は、コロナ禍に縮小され、PTAの「心」の伝承を途切れさせた。表層的な存在意義を問うマスメディアなどの論調にも煽られて、PTAのイメージは悪化のスパイラルに陥っていった。PTAの入会案内にも「入会しなくていいのですよね」という、もはや無関心であるとの声も聞かれるようになった。

(2) 子どものために

我が子が通う小学校、ご縁があって役員を担わせていただくからには、「何かしら子どものためにやりたい」「何かできることはないか」と考えていた。

そんな折、教頭先生も新しい方が就任され、改めてPTAについて話し合う絶好の機会を得た。理想とするPTAの在り方や保護者との関わり方を突合し、答え合わせをするように一致する部分と「開かれた学校」を理想とされるお考えを聞き、遠慮せず、むしろ前のめりでいけばいいのだという思いが広がっていった。そして、この時に冒頭のご提案をいただいた。

「今年は、大高小学校150周年記念の年です。是非PTAとして、子どもたちのために、打上げ花火をやりましょう」

我が子の学校で、花火が打ち上げられた時の子どもたちの笑顔を想像すると、押し寄せるドキドキとワクワクは止まらず、二つ返事で「やりましょう」と答えていた私だった。

2 PTAに対する認識の改革

中長期的な目標として、PTAに対する認識の変革を行っていきたいと考えていた。

そこで、策1「PTAの存在意義の理解」、策2「PTAの活躍の場づくり」を講じていくことにした。

(1) PTAの存在意義の理解

コロナ禍を経て、通常の生活が戻りつつある今、改めてPTAについてきちんと理解してもらう必要があると考えた。

そこで、「PTAがどんな活動をしているのか」「PTAとして今後具体的にどんな活動をしていくのか」ということを、広く保護者に知ってもらい、十分に理解していただくことを目標とした。

(2) PTAの活躍の場づくり

PTAが子どもたちのために活躍していると実感する必要があると考えた。

そこで、令和5年度は、教頭先生からの提案「150周年記念打上げ花火」を実現するために、実行委員会を立ち上げて、子どもたちのためにPTAが活躍できる場を考えた。令和6年度は、学校教育の一環として取り組まれているキャリア教育にPTAが関わっていくことで、PTAの活躍できる場を考えた。

これにより、PTAについての認識が深まると考えた。

3 PTAの実際

(1) PTAの存在意義の理解

ア 令和5年度

① 会長の挨拶

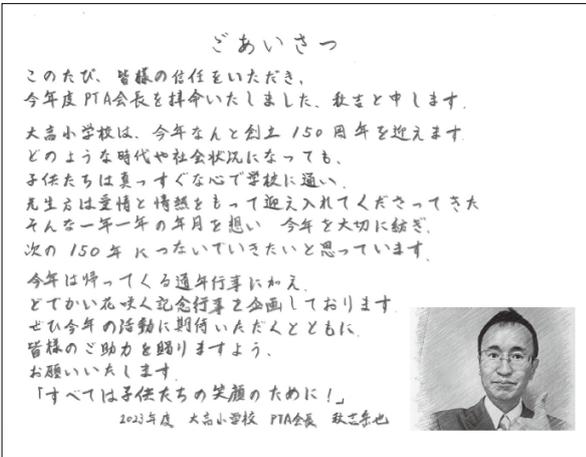


図1 【PTA会長就任の挨拶】

これは、令和5年度PTA総会審議で、PTA会長として承認された時に配信した挨拶文である。

このように会長自らがメッセージを送ることはこれまでになく、初挑戦だったが、自分の伝えたい思いをご理解いただくためには文字として残すことが一番有効だと思い、思い切って挑戦した。

① PTA活動をPR

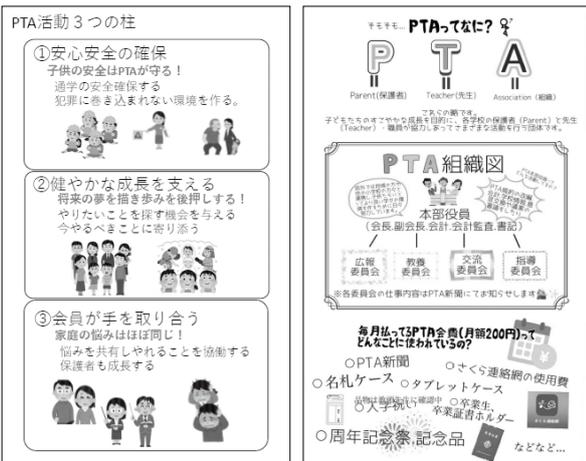


図2 【PTA活動PRのリーフレット】

PTAがどんな活動をしているのかを知っていただくためには、活動内容が分かりやすく、「おもしろそう」と思ってもらえることが肝心だ

と考えた。そこで、なるべく文字数を少なくして、キャッチーな言葉とイラストを駆使したリーフレットを配信した。

イ 令和6年度

前年度と同様に、会長就任二年目であるが、やはり最初の挨拶は肝心だと思い、昨年度に改良を加え挨拶文を配信した。さらに、「安心安全の確保」「健やかな成長を支える」「会員が手を取り合う」の三軸をPTA活動の根幹として行っていくことを、まずは役員全体に周知した。



図3 【PTA活動の根幹である三軸】

(2) PTAの活躍の場づくり

ア 令和5年度

創立150周年記念への参画

大高小学校が創立150周年を迎えるこのタイミングで、PTAとしても、タイトル「大きく高く笑顔をつなぐ打上げ花火」と表して、実行委員会を立ち上げた。

6月、実際に実行委員として活動してもらえる方を募ったところ、「まずは話を聞いてみたい」という思いで30人近くの方が応募してくださった。その後、「打上げ花火キックオフ」というタイトルで実行委員会が立ち上がった。そこからは、10月30日(月)の150周年記念式典に合わせて、前夜祭としての29日(日)の午後から打上げ花火実施に向けて、隔週で実行委員会を開き、打上げ花火の成功のために喧々諤々協議を繰り返してきた。

【打上げ花火実行委員会】

<実行委員募集>5/15(月)~5/24(水)

<第1回>6/18(日)

AM10:00~ 特活室(約30名)

- ・150周年記念を祝う打上げ花火について<キックオフ>

<第2回>6/28(火)

AM10:00~ 特活室(約15名)

- ・打上げ花火実施に向けての課題

<第3回>7/9(日)

AM10:00~ 特活室(約10名)

- ・打上げ花火実施に向けての課題

<第4回>7/23(日)

AM10:00~ 特活室(約10名)

- ・打上げ花火実施に向けての課題

<第5回>8/6(日)

AM10:00~ 特活室(約10名)

- ・運動場で実施する際の危険区域や鑑賞区域の確認

<第6回>9/10(日)

AM10:00~ 運動場(約10名)

- ・運動場で実施する際の危険区域や鑑賞区域の確認

<第7回>9/24(日)

AM10:00~ 特活室(約10名)

- ・運動場で実施する際の危険区域や鑑賞区域の確認

<第8回>10/15(日)

AM10:00~ 特活室(約10名)

- ・打上げ花火の最終確認

保護者からは応援や期待の声が寄せられる一方、「怪我や火災の保証は」「夜の帰宅時の安全は」と、不安な声も多く寄せられた。また、3,000人を超える人が集まる企画運営の経験がない会議は、スクラップ&ビルドの連続だった。迫る本番の重圧と、自分の運営能力の貧しさに、「やめればよかった、今からでもやめてしまいたい」と逃げ出したい気持ちが心を覆っていった。

そんな時、初心の「何かしら子どものためにやってやりたい」「何かできることはないか」に返って、「打上げ花火を成功させよう」と奮い立たせてくれたのが、「打上げ花火をやろう」と最初に立ち上がった仲間の存在だった。何度も心が折れ、そのたびに立ち上がり、とうとう打上げ花火を迎えることができた。

【広報委員会】



図4 【広報委員会から「特別号」発行】

【おやじの会】

<打合せ>7/8(土)

AM9:00~ 特活室

- ・おやじの会企画の擦り合わせ

【町内会協力依頼】

<打合せ>7/9(日)

PM6:00~ 地域コミセン

- ・組長会議にて開催趣旨説明

【学区連絡協議会依頼】

<打合せ>7/20(金)

PM7:00~ 学区集会所

- ・学区主要団体へ開催趣旨の説明と協力依頼

【その他】

<周辺住民への戸別訪問>8/13(日)

PM9:00~ 学校周辺

- ・騒音と飛来ゴミへの理解

また、実行委員会（図4）以外にも、PTA広報委員やおやじの会、さらには地元消防団の火災警備の協力を得られることとなり、地域の皆様の心強い応援が支えとなっていた。

本番二週間前には、消防、警察、花火師、教頭先生、PTA会長、副会長が学校へ集合し、グラウンド状況や観客の出入・導線等の安全確認を行った。

打上げ花火当日は、子どもたちが描いた花火の絵をベースにした招待状を入場の際のチケット（図5）として持参してもらい、約3,000人の観客の元で、大きな大輪の花火を打ち上げることができた。



図5 【打上げ花火招待状】

これまで、おやじの会との連携、地元消防団の警備協力、区政協力委員の皆様、地域住民の方々の理解など、地域の協力があってこそ実現できたと心から感謝している。

イ 令和6年度

キャリア教育への参画

キャリア教育の一環としてキャリアナビゲーター（大高中ブロック担当山口さん）さんに、話を伺う機会を設定させていただいた。

そこで、キャリア教育の意義や目的等について伺ったところ、私たちPTAができることは十分にあると実感した。特に、「一人一人の社会的・職業

的自立に向けて子どもたちに話ができる場」というのは、子どもにとっても、親にとっても大変意義のあるものだと確信した。

そこで、令和6年度の教養委員会で、「PTAとしてキャリア教育の一部に参画し、子どもたちのために活動を進めていきたい」と投げ掛け、活動を開始した。（図6）



図6 【教養委員会の活動の進め方】

今後、子どもたちに、「どんな職業について知りたいか」「調べてみたいか」ということについてアンケートを取り、その職業に関わるPTAの方に講話をいただこうと考えている。講師は、全PTAに公募した中から選出し、「保護者が子どもに自分の職業について話す」というキャリアタイムを考えている。

4 おわりに

会長として、ご縁あって2年目となる。役員が毎年入れ替わるPTA活動において、コロナ渦で縮小し、一旦途絶したPTAの存在意義の継承は、活動の本質を見直す上でよいきっかけとなった。

私の理想とする、先生と同じ目線で子どもと向き合い、子どもたちの笑顔と安全に責任を持ち、自立的に活動できるPTA。そんな姿に、一歩でも二歩でも近付けたのではと自負しつつ、後進の育成にも力を注ぎながら、残り任期を走り抜きたい。